



建築家・東京大学名誉教授

## 内藤 廣 Hiroshi Naito

1950年生まれ。1976年早稲田大学大学院修士課程修了。フェルナン・イゲラス建築設計事務所(スペイン・マドリッド)、菊竹清訓建築設計事務所を経て、1981年内藤廣建築設計事務所を設立。2001~2011年東京大学大学院にて、教授・副学長を歴任。2011年~同大学名誉教授・総長室顧問。2007~2009年度には、グッドデザイン賞審査委員長を務める。



安曇野ちひろ美術館

牧野富太郎記念館

海の博物館

### 主な建築作品

海の博物館(1992)、安曇野ちひろ美術館(1997)、牧野富太郎記念館(1999)、鳥根県芸術文化センター(2005)、日向市駅(2008)、高知駅(2009)、虎屋京都店(2009)、旭川駅(2011)など。

人というのは面白いもので、たまに鏡を見ないと自分の顔を忘れてしまうものです。自分がどんな表情をしているのか忘れてしまうのです。毎日暮らしている見慣れた風景も同じです。自分の住んでいるところの特徴というのは、とかく意識に上らなくなるものです。

たぶん石見地方に住んでおられる方たちは、あまり気に留めていないと思うのですが、石州瓦の赤い色が造り出す風景は、外から来た旅人にとっては異様です。特に関東や東海の銀瓦になれた人の目には、衝撃的なほどに異様な風景に映るはずですよ。

わたしも関東で生まれ育った人間ですから、はじめて訪れたときは違和感を感じました。この地方の人は何でこんな色使いをするのだろうか、と黄色みがかった赤に釉薬が掛かって照り光りする石州瓦を不思議に思ったのを覚えています。しかし、通ううちに印象が変わっていきます。色の深さや光の状態によって微妙な表情を見せるこの材料の良さに目がなじんでいきます。とくに、緑を背景にしたときのこの瓦の色は、この上なく美しいものだと感じるようになっていきます。

高い耐久性を持つ石州瓦の性能や北前船によってその航路沿いに普及した歴史などを知るにつけ、この瓦の魅力に引き込まれていきました。鳥根県芸術文化センターの設計をするようになって、この素晴らしい材料で建物を包むことが出来れば、建物は高い耐久性を獲得することが出来るし、なにより、この地方ならではの唯一無二の建物が出る

## 発見と驚き、そして感動

はずだと考えるようになっていきました。

この建物の大きな特徴は、屋根だけでなく外壁にもこの瓦を使ったところなんです。これがなかなかたいへんでした。屋根瓦の形は数百年の間に改良を重ねて作られたものです。しかし、これまで誰もそれを大規模に外壁に使ったことはありません。模型を幾つも作り、一年掛けて細部の検討を重ね、ようやく実現するところまでこぎ着けることができました。

建物が出来る上がる過程で、現場に外壁のサンプルが立ち上がりました。それを見たときの驚きは、今でも忘れることが出来ません。空の色を反映して瓦の色が千変万化するのです。晴れているときは薄いブルーがかかった色になります。曇り空の時は、アルミのようなメタリックな色になります。夕暮れ時は赤く染まり、日没間際にはわずかに緑色に染まります。間近に見れば、たしかによく使われている石州瓦なのですが、垂直に立てた壁に使うと、誰もが予想しなかった材料へと変身するのです。こんな不思議な材料はない。それだけでなく、その表情がとても美しい。

出来上がった建物は、石州瓦で覆われています。石見地方の光を反映して、外壁の表情が、時々刻々、そして四季折々変わっていきます。この建物が、石見の素晴らしい、石州瓦の素晴らしい、つまりみなさんの暮らしの中にある素材の素晴らしいさを再認識するきっかけのひとつになってくれればと願っています。

